
カットマニア

えせん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カットマニア

【Nコード】

N7035T

【作者名】

えせん

【あらすじ】

同じクラスの川崎さんはよく体のどこかにケガをして登校する。本人は周囲に笑顔で受け答えしているけれど……。

前編（前書き）

かなり前に書いたものが出てきたので投稿してみました。多少グロテスクな描写がありますので、ご注意ください。

前編

高校で同じクラスの川崎さんは、よく体のどこかにケガをして登校する。

ある時は足にアザをつくってきたり、ある時は手に包帯を巻いてきたり、時には首に締められたような痕がついていることもあった。最初の頃は、クラスのみんなも心配して「どうしたの?」「大丈夫?」などと声をかけていたが、川崎さんはいつも、「気にしないで。たいしたことないから」と笑顔で受け応えをしていた。

そんな3ヶ月前、匿名で学校になんらかの連絡が入り、ウチの担任と生活指導の先生が川崎さんの自宅に訪問することになった。

そして翌日。

川崎さんの父親……いや、正確には2番目の父親が、虐待と傷害の容疑で逮捕された。

川崎さんは、中学の頃に父親が他に女をつくったことが原因で、両親が離婚している。

その後母親は再婚するも、2番目の夫となった相手が最悪な男だった。

日が経つにつれ本性を現し、酒を飲んでは川崎さんや、彼女の母親に過度な暴力を振るうようになった。

それで半年前、川崎さんが高校に入学した一週間後、ついにその男の暴力に耐えかね、川崎さんの母親は娘である彼女一人を残し、自分だけ逃げてしまったのだ。

それから、川崎さんの2番目の父親の暴力はさらに過激さを増した。

母親が自分を置いて逃げてしまったから、暴力の矛先は川崎さん一人に向けられた。

それが川崎さんがよくケガをして学校に登校してきたことの真相だった。

そんな事実が、“父親役”の男逮捕によって発覚してから約2ヶ月。

夏休みが明けて、何故かまた川崎さんは腕や足に包帯を巻いて登校してくるようになった。

日によつては、包帯に血が滲んでもあった。

しかしクラスの連中は、何か妙に気を使ってか、あの事件で聞きづらい雰囲気になってしまつてなのか、あえて彼女に「どうしたの？」と尋ねる者はいなかった。何事も無いかのように、川崎さんと普通に接している。

だけど、僕はさすがに我慢できなくなつた。

そしてある日の放課後、つい、僕は彼女が帰り支度で一人になつた時に聞いてしまった。

「ねえ、なんでケガしてるの？今は一人暮らしなんでしょ？」

直後、なんとという野暮でデリカシーのないことを聞いたもんだと自分でも反省した。彼女の心を僕がまた傷つけたものだ……。

けれども川崎さんは、しばらく視線を落とした後、笑顔で僕にこう言つてきた。

「ねえ？例えば君は、自分が生きているってことについて、どう思う？」

「……へ？」

川崎さんの、思いもよらない意表をついた問い返しに、僕は思わず考えもなしにこう答えていた。

「え……えーと、んー。か、川崎さんが生きている理由と、同じじゃないかな……？」

シンと教室の空気が静まる。

川崎さんは、スツと立ち上がつてカバンを肩にかけ、僕に言った。「ウチ来る？この腕のケガの理由、教えたいよ」

川崎さんの家は、今はアパート。2階の一番端の部屋のドアを開け、僕は彼女に続いて部屋に入った。

中は、案外と殺風景で物が少なく、変に落ち着いていた。

けれども、ひとつ気になったことがあった。部屋の床の真ん中に、何かを零したような、赤黒く変色したシミ……。

なんだろうと、僕がジッとそれを見つめていると、川崎さんが、
「気になる？」と問いかけてきた。

「え？」と聞き返す僕。

すると彼女はおもむろに上着を脱ぎ、ペンたてにあったナイフを手を取った。

「それね、私の血なの」

川崎さんはそう言うのと、いきなりナイフで自分の左腕の包帯を引き裂き始めた。

あつという間もなく、包帯がビリビリと音を立てて破れ、スルスルと彼女の腕から滑り落ちていく。やがて露わになる彼女の肌……。

その瞬間、僕はギョツとした。

なんと包帯をとった川崎さんの腕には、大きく、鋭利な刃物で切り裂かれたような裂き傷が、まだ真新しく、生々しく、痛々しくいくつも残されていたのだ。血も少し滲んでいる。

そして傷は、文字を形づくるように並んで切り刻まれていた。

《 I LOVE ME 》

「……ねえ、『カットマニア』って知ってる？」

「えッ？」

目を丸くしてしばし彼女の傷を凝視していた僕に、川崎さんは尋ねてきた。

「こうやって、自分の体をナイフとかで切ったり傷つけたりすることだね、快感とか、何らかの意味を見出そうとする人のこと。一種

の異常性癖になるのかな。リストカッターとかもそう……。

私の場合ね、今年の夏になってからかな、酷くなったのは。“あの男”が逮捕される直前辺りから――”

……なぜだろう。

こんな衝撃の真実と痛々しい切り傷を目の当たりにしながら、この時、僕の心はなんだかやけに落ち着いていた。

川崎さんの声が、それ以上に穏やかだったからだろうか……？

後編

「こんな人生送ってきちゃったからさ、高校入る頃には私はもう、自分は生きる必要のない人間じゃないんじゃないのかな、なんて力ツコつけたこと思い始めてた……。高校に入学して、唯一信じてた母親にも裏切り逃亡されて、私一人、あの男の暴力受け続けて……。もしかして私は、“生きるべき人間じゃない”のかも、とさえ考えるようになった。それでついに死のうと思つてさ、あの男が居ないときに手首切つたの。」

そしたらその時よ。ドクドク出てくる赤い血を見て私の中に衝撃が走つたのは……。

うーん、なんてゆーのかなア、一言で言つと、『快樂』？ いや、もつと正確に……。『生きている実感』ていつの？

『ああ、赤い血が流れてる……。私の体にも赤い血が流れているんだ。やっぱり私も生きている人間なんだな』って。

それからだった。私が、私自身の体をこつやつて傷つけることに快感を覚えていったのは……。

ある時はふとももを切つたり、指を半分くらいまで切つたり……。ああ、そうそう。ちよつと恥ずかしいけど、実は私、右の乳房にも大きな傷があるんだよ」

躊躇いもなしにそんなことをズバズバと明るく話してのける川崎さんの言葉に、僕はただただ黙つて耳を傾けていた。

「……でもさ、こんなのつてフツーに考えたらおかしいじゃん？ 笑つて友達を誤魔化すのも大変だったし。

けどね、気づいた時にはもう、私、ボディカットをやめることが出来なくなっちゃつてた。

私が自分の体を切つて血を流すこの行為だけが、私が生きてるってことを実感できる瞬間になつてたから……。

——ねえ、君さ、この傷の文字の意味わかる？ 『I LOVE

ME』……!」

自分の傷を指差して聞いてくる川崎さんに、僕は戸惑いながら答えた。

「私は……私を……愛する」？」

「そう！ カッコイイでしょ？ まあ中学生レベルの英語だけだね」
彼女はニコツと笑うと、何を思ったか手に持っていたナイフに再び力を込め、こともあるうか僕の目の前で、自分の腕の『I LOVE ME』の傷の下に刃を突きたてた。

「えっ？ ちよっ!？」

僕が止める間もなく、線を描いた新たな傷口から真っ赤な血が、ポタポタツと床に滴り落ちる。

「へへっ！ ほら、“ビックリマーク” 『I LOVE M

E』ね！

言つとくけど、君に見せたのが初めてだからね。それと、他の人には言っちゃダメだよ？」

笑顔で自分の傷をどこか得意気に見せてくる川崎さんに対し、僕はそれ以降、何も答えることができなくなった。

僕は、自分の部屋で、さっきのことを思い出していた。

「“生きている実感”……か。なんで僕にだけ見せたんだろっ？」

僕は引き出しを開け、なんとなくカッターナイフに手を伸ばし、唇をかみ締めた。

ブシュッ!!

鋭いものが突き刺さる感覚。

「……ッ!! 痛つてえええッ!!」

僕は手を押さえながらカッターナイフを放り投げ、のた打ち回った。川崎さんと同じように、手の平からは赤い血が流れ出してくる。慌てて救急箱を引っ張り出し、傷口に消毒液をぶっつけた。

「やっぱり、わかんないっての……!」

川崎さんがあんなになつてしまったのは、彼女が育ってきた環境

のせいだ。彼女は何も悪くない。

……けれど、僕はやっぱり何か違う気がした。

確かに僕は川崎さんと違って、何一つ不自由なく育ってきた。だけれどやはり何か違うのだ。

「自分の体を自分で傷つけないと……生きてる実感を求められないのかよ？ ……そんな悲しいコト……笑って話すなよ。わっかねえ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035t/>

カットマニア

2011年6月1日02時40分発行